

非文字知社会と中世の時間・暦・交通通信・流通に関する研究

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

井上, 聡
東京大学史料編纂所 : 助教

細井, 浩志
活水女子大学文学部 : 教授

橋本, 雄
北海道大学大学院人文科学研究院 : 准教授

他

<https://hdl.handle.net/2324/17911>

出版情報 : 2010-03
バージョン :
権利関係 :

『政基公旅引付』にみる中世の時間

楠瀬 慶太 (高知新聞社)

一、はじめに

前近代の日本社会における時間に関わる研究は、暦・陰陽道との関係で行われてきた。とくに、文献に記載のある古代や近世が中心に研究が進んだが、中世については不明な点が多い。古代から中世への変化について、細井浩志氏は、10世紀以降の律令官僚体制の解体・縮小を天皇の「時間支配」から分析(細井 2002)。厚谷和雄氏は、平安時代における頒暦制度の崩壊、漏刻から香時計への変化を論じている(厚谷 1993)。中世社会では、宣命暦に基づいた独自の暦算や地方暦、私年号などが使われた。このような中で、時間は定時法ではなく、不定時法で数えられるようになったとされるが、不確定要素が多く、実態については不明な点が多い。

本報告では、これまであまり取り上げられなかった日記類の時間記載に注目する。京都で書かれた『後法興院政家記』、和泉で書かれた『政基公旅引付』、薩摩で書かれた『上井覚兼日記』の3つの中世後期の古記録の時間記載を比較。中世後期における中央と地方の時間の書き方や認識について分析し、当時の時間認識や時間計測の問題を考えてみたい。

なお、3つの日記の集成表(表1、表4、表9)は、別のExcelファイル(「日記時間記載集成表」)、史料1～6はPDFファイルにまとめた。

二、『後法興院政家記』にみる中世の時間—中央の時間—

『後法興院政家記』(平泉澄校訂本) 筆者 近衛政家(1444～1505)

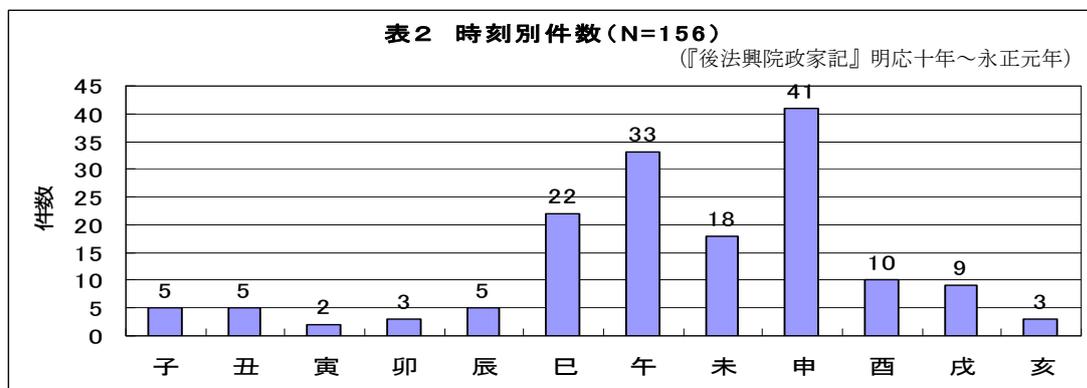
記載年 文正元年(1466)正月一日～永正二年(1505)六月四日

●時間記載(～刻)を抽出¹⁾—明応十年(1501)正月一日～永正元年(1504)十二月卅日 →表1

●時間記載の分類

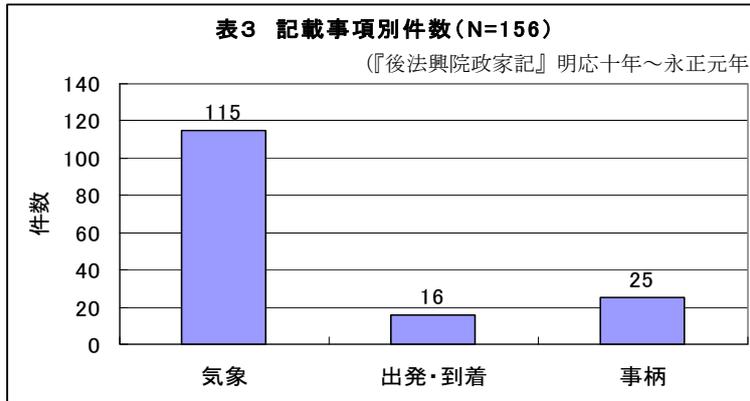
・記載方法 → 全てが「～刻」(点、分、刻といった細分は無し)、「～刻許」が15件

・時刻 → 表2



¹⁾ 戌刻の異称とされる黄昏(くわうこん)という表現が見られるが、ここでは除外した。

・記載事項 → 気象、出発・到着、事柄に関わる記事に分類可能（表3）



→

- ・気象に関する記事㊟
- ・事柄に関する記事
→ 火事の記事関㊟

【気象】

・雨・風・雷の時間

「夜来雨、巳刻止、時正也」（明応十年二月廿八日条） → 雨

「暁来大風吹、雨洒、巳刻終止」（文亀元年閏六月十五日条） → 風・雨

「申刻小雷甚」（文亀元年七月十八日条） → 雷

・地震の時間

「今暁寅刻大地震」（明応六年十月十八日条） → 時間

【出発・到着】

「巳刻向鷹司亭」（文亀二年三月廿五日条） 「午刻詣頂妙寺」（文亀元年三月二日条）

【事柄】

「申刻許近所飯河山城守在所騒動（中略）云々」（文亀二年七月一日条） → 事件

「去夜改元及今日午刻云々」（文亀元年三月一日条） → 改元の時間

「午刻南方有火事、膏薬道場云々」（文亀二年三月五日条） → 火事の方角・時間㊟ (18/25)

「子刻北方有産事」（文亀元年三月六日条） → 吉報

「申刻庭田宰相中将死去云々」（文亀元年十月廿五日条） → 訃報

●時刻占い[橋本 1993]

雨 「暦日講釈」（嘉永元年(1848)十月再刻） → 史料1

地震 「嘉永雑書」 → 史料2

「増補民用晴雨便覧」（明和四年（1767）発刊） → 史料3

江戸期の史料

☞ 『後法興院政家記』では、陰陽師からの「風雷雨・火事・地震・星・月・太陽」など
に関して度重なる布告（勘文）が出されている（史料4～7）

◎中世京都の公家社会

- ・陰陽師の影響力を強く受ける
- ・京都の公家が認識し記録する時間—陰陽道による吉凶判断のために認識されるもの

三、『政基公旅引付』にみる中世の時間—地方の時間①—

『政基公旅引付』（中世公家日記研究会編）

筆者 二条政基（1445～1516）

記載年 文亀元年（1466）三月一日～永正元年（1505）十二月三十日

●時間記載を抽出²⁾—文亀元年（1466）三月一日～永正元年（1505）十二月三十日 → 表4

●時間記載の分類

・記載方法—A～D類に分類（「～許」が9件）→ 表5

A類…十二支名のみのも

「～剋」（文亀元年十月十四日条「亀若亥剋下着」）

「～時」（文亀三年八月廿三日条「者午時比長盛来迎申云」）

「時～」（文亀元年九月十五日条「今夜月蝕、曆云時申」）

「～～剋」（文亀元年九月一日条「日蝕未申剋也」）

「～剋（刻）許」（文亀元年六月廿二日条「及亥剋許從槌丸注進云」）

B類…十二支名を上・下で分けるもの

「～下剋」（文亀二年八月廿一日条「件乱入衆ヲハ可追立之由命之了、于時卯下剋也」）

「～半剋許」（永正元年七月七日条「者就枕、時寅半剋許也」）

C類…十二支名を点（點）・剋で分けるもの

「～一點」（永正元年四月五日条「巳一點ニ此村大木識事高聲告云、既群勢見来了」）

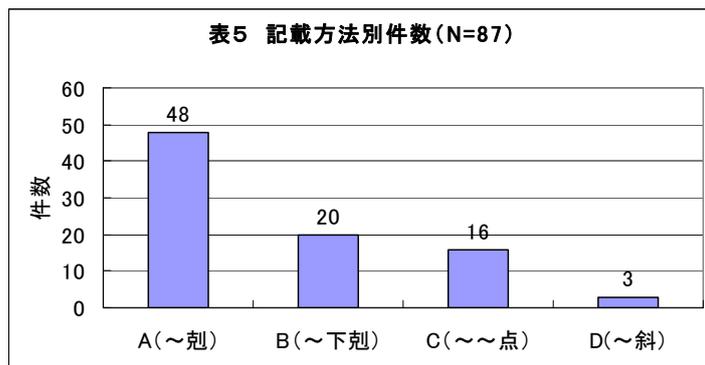
「～一剋」（永正元年三月廿八日条「大木村之當番頭彦五郎左近、戌一剋来云」）

「～三點」（文亀元年閏六月四日条「此趣廿七日未三點ニ從傳奏只今可披露候」）

「～四點」（文亀元年九月十五日条「及亥四點聊有光色」）

D類…十二支名に斜をつけるもの

「～斜」（永正元年四月五日条「先各引歸ヲ見テ罷歸也ト定雄申来了、于時申之斜也」）



-
- ・A類が最も多い
 - ・「～上剋」は無し
 - ・「～二點」は無し

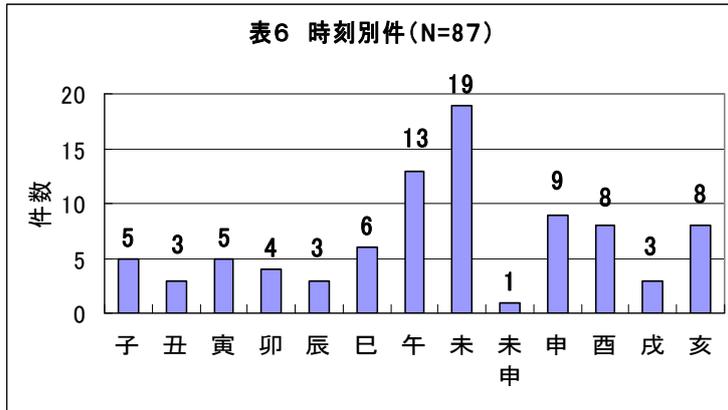
²⁾ 鶏鳴（丑刻）、夜半（子刻）、黄昏（戌刻）も以下のようにいくつか見られるが、ここでは除外した。

「鶏鳴浴水參新宮社」（文亀元年三月廿八日条）

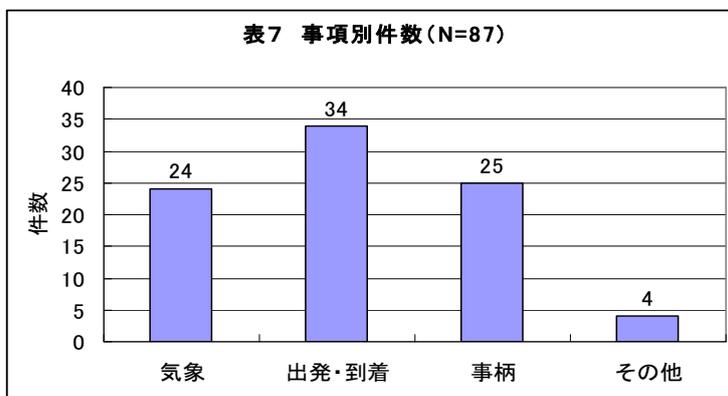
「去十一日夜半之雷」（文亀元年五月廿七日条）

「及黄昏從堺兵庫帰来」（文亀元年六月廿四日条）

・時刻別記載数 → 表6



・記載事項 → 気象、出発・到着、事柄に関わる記事に分類可能 (表7)



→

- ・気象の記載の比率は少ない
- しかし、確実に存在
- ・過去の事柄、出発・到着の記載が多い

【気象】 「未下剋雨一行又属晴」(文亀元年閏六月九日条)

「未一點振雷轟聲」(文亀元年六月十三日条)

「去卯剋日蝕也」(文亀三年三月一日条)

【出発・到着】 「在利ハ及酉下剋越無辺光院了」(文亀元年八月廿八日条)

「及酉一點自京都飛脚到来」(文亀元年六月廿一日条)

【事柄】

戦争・騒動 → 伝聞 (多)

「早旦巳一剋地下物忿」(文亀元年八月廿八日条)

「寅下剋庄内忿劇」(文亀二年六月廿六日条)

「去卯一剋自國方山之陣へ押寄」「長盛注進云」(文亀二年九月十九日条)

「地下一味令神水畢、明日辰剋ヨリ可引篠也」「云々」(永正元年七月十九日条)

儀式

「丑剋ニ社頭之儀終云々」(文亀元年八月十三日条)

「事外大儀之風流也、自酉一點致条々之興、及子一點御了」(文亀元年八月十五日条)

就寝 「者就枕、時寅半剋許也」(永正元年七月七日条)

昼寝 「午剋許聊付枕之處、於九条亭御料人之被沙汰發句とて夢想ニ」(文亀元年四月廿八日条)

夢 「去暁寅剋夢想」(文亀三年一月廿日条)

吉報 「申一剋女子出生」(文亀三年三月十六日条)

訃報 「去辰下剋當寺之住持死去」(永正元年十二月四日条)

【その他】

予定 「此趣廿七日未三點ニ從傳奏只今可披露候」(文亀元年閏六月四日条)

約定 「午剋迄ト申延之間」(永正元年七月九日条)

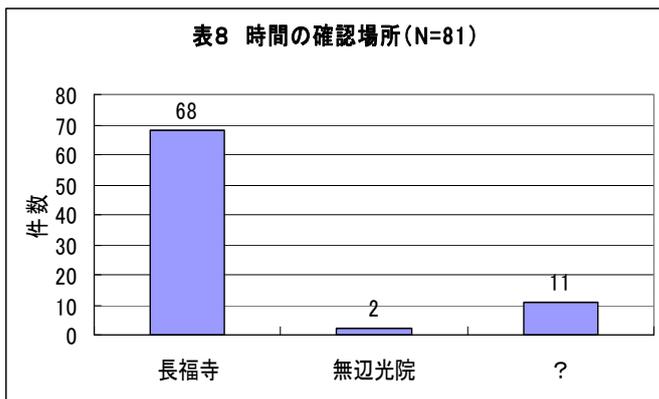
・場所 → 表 8

長福寺 「及申一點自日根野村移入山田村大木之内長福寺」(文亀元年四月一日条)

無辺光院 「及申下剋着無辺光院」(文亀元年三月廿九日条)

? 「去夜亥下剋犬鳴山七寶瀧寺之中西坊ニ夜盜入訖」(文亀元年十一月十一日)

↑ 伝聞



- ・長福寺(寺)での確認が多い
→ 「～刻～点」という細かい時間記載
- 状況証拠としては何らかの時計が存在している可能性(定時法?)
- ・伝聞や「～許」のような場合は時計による確認ではない(不定時法?)

◎京都の公家が体験した地方(在地)社会(日根野荘)

- ・陰陽道の影響力は弱まる
- ・より現実的な出来事・時間への関心
- ・地方において京都の公家が認識し記録する時間—より現実的な出来事の起きた時間
- ・地方の寺にも時刻を測る何らかの道具があった可能性 → 香時計か?
⇔ 定時法か? 不定時法か?—日記の記載だけでは判断しかねる

四、『上井覚兼日記』にみる中世の時間—地方の時間②—

『上井覚兼日記』

筆者 上井覚兼(戦国末期の島津氏の武将)の日記である。

記載年 天正二年(1574)八月一日～天正十四年(1586)十月十五日

(欠損: 天正三年五月～十月、天正四年の一部、天正五年～十年十月)

楠 慶太
『政基公旅引付』にみる中世の時間

よって、中世後期（室町時代）の時間については、その計測方法や認識も地域や身分によって異なっていたことが明らかになった。

【参考文献】

- 厚谷和雄 1993「奈良・平安時代における漏刻と昼夜四十八刻制」『東京大学史料編纂所研究紀要』四
- 網野善彦・大林太良・桃裕行・江川清 1985「日本人の時間意識をめぐって—古代～中世を中心に—」『言語生活』No.403
- 橋本万平 1966『日本の時刻制度』塙書房
- 細井浩志 1995「古代・中世における暦道の技術水準について」『史淵』一三二
- 細井浩志 2002「時間・暦と天皇」『岩波講座 天皇と王権を考える』第8巻 コスモロジーと身体、岩波書店
- 細井浩志・峰崎綾一 2002「『日本天文史料』未収録の日食と記録—六国史終了以降一六〇〇年以前—」『活水論文集』第45集
- 柳原敏昭 2002「室町時代の陰陽道」『陰陽道の講義』嵯峨野書院